

九鬼周造の旧山科邸について

元『九鬼周造全集』編集協力 石垣哲二

九鬼の山科にあった住居について、文章として残っているものは2点しかない。1点は、『九鬼周造全集』第1巻月報の現在は京都大学名誉教授の多田道太郎氏「九鬼氏旧邸訪問記」であり、もう1点は前久夫著『京が残す先賢の住まい』（京都新聞社）の中の「九鬼周造の山科旧邸—『いき』の構造』の館」である。住居は現在は取り壊されていて、実際にその目で見た人も少なければ、写真も余り残っていないので、私が撮影したもの（時刻はまちまち 機材はNikon FM, F3、レンズは28mm）が今となっては貴重なものとなった。どこまで正確に覚えているかわや不安な面もあるが、資料として供する。是非上記の2点と読み合わせていただきたい。また人名については拙論「『九鬼周造文庫目録』と『九鬼周造全集』の経緯」参照。

私が初めて訪問したのは、全集刊行の年、昭和55(1980)年5月3日である。文庫の中にある書類から住所はわかっていて、40年近く経っておりまさか現存するとは思ってもしなかったが、せめて跡地だけでもカメラ片手に妻と探しに行ったのである。行くと一部石垣と板塀で大部分は生け垣で囲われた大きな家があった。一周すると1000坪ほどもあり東側を除いて三方が道路に面している。写真1が北側で、2が南側になる。以下括弧内は写真の番号を表す。

もしかしてとは思ったが、まさかと躊躇っていると、妻が「折角来たのだから聞いてみよう」と北側の勝手口の呼び鈴をさささと鳴らした。こういう時は女性の方が度胸があるものだ。すると中から女性が出てこられて「何でしょうか」とおっしゃるので、恐る恐る「この辺りに九鬼周造という人のお屋敷があったそうですが、ご存じありませんか」と尋ねると、「ここがそうです」とおっしゃられ、初対面で何の紹介状も持たない我々を中へと導き入れて下さったのである。その方が木下綾さんである。普段は空き家で、たまに掃除に来られるとかで、運良くそのたまにと遭遇したわけだ。納屋の側を通して、西向きの玄関(3)から入れていただいた。偉い先生が住んでおられた家と聞かされて、出来るだけ元の姿を保とうとの強い意思で守ってこられたそうである。

正門(4 これも内側から撮影したもの)も西向きにあり、玄関前の階段下はおそらく人力車が入っていく車寄せになっていたものと思われるが、その時は花好きの藪重雄氏(記憶に間違いがなければ、昔あった「鶴丸自転車」「鶴丸アルマイト」の経営者)が丹精された鉢が所狭しと並べられ、中に「月下美人」があった。正門から玄関までも僅に200坪ほどあったのではなかろうか。玄関の右には広大な庭へと通じる冠木門(5)があった。

玄関を入ると、真っ直ぐのよく磨き込まれた廊下が台所まで続いている(6 廊下の東側から玄関方面)。左に、和室や洗面所や手洗い場(7)があり、驚いたことに、そのときガスの規格が違うとのことで使われてはいなかったが、給湯設備があった。右には応接間(8)がある。床の間が極めてすっきりした感じになっている。応接間の南半分(9)には、出窓部分がサンルームになっていて、そこから庭に出られるようになっている。写真10は隣の食堂である。隣といっても隔てるものはない。椅子は黒檀であろうか、重く頑丈であった。見にくいが奥に簡易ベット(11 昼寝用?)のようなものがある。応接間と食堂の天井部分の灯り(12・13)は斬新である。建物全体に言える特徴は、垂直水平の直線で構成されていることである。照明器具以外で曲線の所といえ、茶室の給仕口ぐらいしか思い出せない。従っていかにも瀟洒な感じがする。

天井にシミが見える。茶室の天井にもあった。後日、妹の大塚園(園子とも)さんも交えての話の中で、かつてこの家を買収に来た人がいたそうである。大塚さんが「そのお金をどうして工面されるのですか」と聞いたところ、「東京の家を処分して」との答えに、即座に「だったらお断りします。失礼ですがその程度の資力ではこの家は維持できません」とおっしゃったそうである。聞くだけでご苦労が偲ばれる。

写真14は、家全体を南側の庭から撮影したもの。庭の規模がわかる。写真15は南西側から撮影したものの、2階の向かって左側が和室の寝室で、右側が書斎になっている。1階中央の出窓になっているところが応接室で、その前に例の日時計があった。この日時計はその当時から表面がいつ剥落するかかわからない状態であった。1階右奥が、少し見えにくいだが、茶室になっている。その破風の下に「詠帰」の扁額がか

かっていたものと思われる。写真16はその3日後の5月6日、九鬼の洋月命日で全集発刊の報告に関係者全員で法然院に墓参した後、訪問した時のもの。撮影した角度は日時計の辺りから南西方向であったように思う。小さくて見にくいのが、左から竹田さん、大塚さん、合庭さん、澤瀉先生、佐藤先生、柿沼さん。樹種は極めて多種で、自分に植物の知識がないことをいまさらながらに残念に思う。池があり、築山があり、随所に九鬼の意匠が感じられた。

階段は二つあり、写真17は茶室を出た直ぐの所にある東の方で、かなり急勾配になっている。写真18が玄間に入って直ぐにある西の方である。写真19は西の階段を上った2階のものである。見にくいが画面中央左下にスリッパ入れがある。

次に茶室に移る。私に茶道の心得や茶室についての知識があれば、もっと狙った撮影が出来たものを残念でならないが、わかる範囲で説明したい。写真20・21は茶室南側。写真22は水屋で、北側にある。23は茶室内部を外から見たところ。撮影方向は南東になる。24は茶室東面の床の間。25は24の天井部。26は茶室の灯り。東から西を向き、自然光での撮影を試みた。27は茶室の襖。この松葉の襖紙は大塚さんによると、京都の襖紙専門店まで以前と同じものを探し求められて張られたとのことであった。取っ手も有名な松葉になっている。ちなみに、薮氏が他界された後、この旧九鬼邸を相続された三姉妹で区分所有され、建物の辺りを所有されていたのが大塚さんとおっしゃったように記憶している。

この茶室の写真撮ったのは、昭和61(1986)年に木下さん、大塚さんと私たち3人を招いて下さった時である。写真28はその時のものである。澤瀉先生と大塚さんはもはや鬼籍に入られた。今思えば在りし日の九鬼邸をそのままに再現して見せてあげようとの暖かいご配慮であった。家の中もお庭もお茶も、もてなしの心が表れていないものが一つもなかった。この茶室で食事をいただいた。何という贅沢だろう。聞けば、終戦後進駐軍が、当時としては珍しい水洗便所や給湯設備があったこの家を接収しようとしていたらしい。薮氏がどのようにしてそれを拒んだのかその詳細までは聞いていないが、よくぞペンキから守って下さった。

写真29は茶室南側(貴人口)からのもの。その手前下に写真30のつくばいがある。

その後もう一度、佐藤先生と私が大塚さんに招かれた。この家が売却され解体されることが決まってからである。従って片づいておらず、このような写真を公表することに心理的抵抗を覚えるが、今となっては貴重なものなので私の責任で掲載する。

31・32の2枚の写真は九鬼文庫に収まっていた書斎である。どのように書架が並べられていたのか、知るべくもないが、雰囲気だけは伝わってくる。本の量から考えると、他室にもあったと思われる。ドアは隣の寝室につながっている。全体に暗いのは雨戸がすべて下りているからである。

この日、何でもどうぞとの大塚さんの許可を得て、先生と私は、茶室の襖紙や、かの有名な1階和室の襖の取っ手などを戴いた。何とももの悲しい作業であった。写真33。

旧九鬼邸取り壊しのことを岩波書店の、当時『思想』編集長になっておられた合庭さんに連絡した。合庭さんは「NHKに頼んで記録してもらってはどうか」とアドバイスして下さいと同時に、京セラの稲盛さんを知っているから稲盛さんの方で買い取ってもらえないか聞いてみることも言って下さった。しかし、京セラの審査でそれほどの価値がないということで、取り壊しが決定した。甲南学園が買い取るという選択肢はあったのだろうか。

現在、跡地には34の写真(写真1とは同じ位置で撮影)のようにマンション・社員寮のようなものが建っている。更に、数えてはいないが、かなり多くの戸建て住宅も建っている。しかし、西と南の生け垣が当時の面影をまだ少し残しているのはありがたいことだ。最初1000坪あったという九鬼邸も、薮氏が亡くなった時に、相続税対策に東の300坪(私はそう聞いたように思うが、100とも200とも書いてある。この場所は九鬼が畑をしていたという話もある)を売却し、今また…方丈記の世界である。最後に、データを記してこの稿を終える。

(H19.3.26)

昭和15(1940)年、九鬼 満52歳 山科四宮鎌手町19番地に転居

家は前年12月25日に竣工 施工業者は大材組

1階 50.49坪 2階 31.65坪 高さ27.5尺

施工費 本体266000円 物置4.5坪 400円



1 北側



2 南側



3 玄関



4 正面



5 冠木門と道しるべ



6 廊下



7 手洗い場



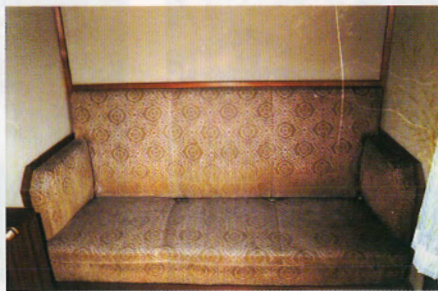
8 応接間



9 応接間南



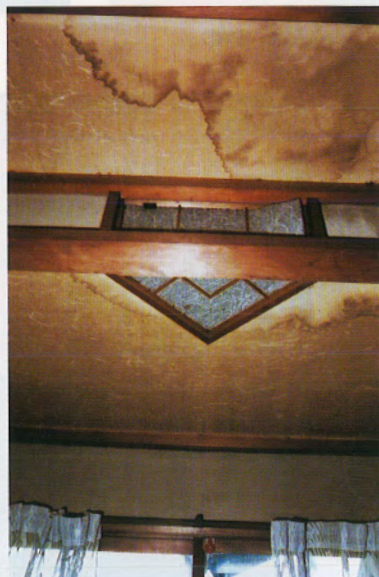
10 食堂



11 寝台



12 応接間南東隅角の灯り



13 食堂上 南側の灯り



14 庭からの全景（南）



15 庭からの全景（南西より）



16 日時計横から南西方向



17 東階段



18 西階段



19 西階段2階



20 茶室南側土間



21 花明かり窓



22 水屋



23 給仕口と内部



24 床の間



25 床の間の上部



26 茶室の灯り



27 茶室口の襖



28 佐藤先生・木下さん・石垣・大塚さん・澤瀉先生



29 茶室南側



30 つくばい



31 書斎西半分



32 書斎東半分



33 取っ手の取り外し作業をされる佐藤先生



34 現在の九鬼邸跡（夕暮れ時に撮影）